

中 尾 正 三

(要旨) この研究は、昭和36年来の継続研究「倫社の学習指導の実践的研究」の第七報告である。内容は次の項目からなっている。

- ① 今までの研究経過
- ② 生徒の意識
- ③ 教科書の全体構造
- ④ 配列構造
- ⑤ 倫理思想分野の分析

<その1> 系統思想史の場合

- ㊦ 思想分野の中での思想の割合
- ㊧ 古代中世の西洋思想の比重と問題点
- ㊨ 近代思想の占める比重と問題点
- ㊩ 現代思想の取り扱い方
- ㊪ 日本思想の取り扱い方

<その2> テーマ別扱いの場合

- ㊦ 構造
- ㊧ テーマの内容
- ⑥ 倫理学習への反応とその変化
- ⑦ 残された問題点

I 今までの研究経過

昭和36年から41年度まで次のような研究をした。

36年度 第1報告

- ◎ 生徒の関心・興味・意識から出発
- 話し合い—バズ討義、資料集の自作、評価せず
- ◎ 講義学習とグループ学習の比較検討
- × 話し合いの限界(A) 抽象名辞・固有名辞・思想の系譜のとり扱い(B)

◎, ○はテーマ
× は残された問題点
(A)は方法上の,
(B)は内容上の問題点

37年度 第2報告

- ◎ 講義学習の中での内容のとり扱い
- ヘレニズム思想(とくにエピクロス)・東洋思想・宗教・マルクシズムに重点
- ◎ 一斉学習の中での集団思考
- × もっと掘り下げを—(B), 話し合いはやはり必要である—(A)・評価は必要である—(A)

38年度 第3報告

- ◎ 1年から週1時間2年間継続実施
- ◎ 系統学習とテーマ学習の比較研究
- × 相互交流の重要性(A), 抽象的論理的思考の発達段階と学習内容(B), 焦点づけと具体化(B—

A)

39年度 第4報告

- ◎ 講義・自発発表・話し合い学習の比較研究
- ◎ (心→倫)から(心→社)への変更
- × 話し合い学習の中での知的系統(B—A), 講義学習の中での相互交流(A—B)
- 教科書の内容構造・配列の分析(B)
- 生徒の抽象的思考の発達段階と教授方法(A)

40年度 第5報告

- ◎ 教材構造配列のくみかえによる学習効果の比較検討(B—A)
- 倫社思想史と世界史(B)
- ◎ 政経学習上の困難点(A—B)
- ◎ 倫社・政経学習を終了しての生徒の感想(A・B)
- × 内容の精選・構造化(B), 抽象的思考力を如何にして身につけさせていくか、受験_ニに対してどのように対応するか。(B・A)

41年度 第6報告

- ◎ 教授—学習課程の比較研究(系統的講義, テーマ別教科書, 資料中心)
- 倫社・政経学習の効果と障害
- 高校生の意識・態度・思考
- × 「思考の隘路」

II 生徒の意識(関心と読書傾向)

さて、今年は第7年目の研究に入ったわけであるが、対象としての高校生の意識をみると、その関心・興味は次のような比重をもっている。

青春(恋愛・男女交際・友情・etc)	25.8%
人生(宗教・芸術・家庭生活・etc)	22.3%
人間(生き方・人間関係・人間の行動・性格・etc)	21.9%
学生生活(将来の職業選択を含む)	16.4%
社会(政治・経済・国際関係を含む)	13.6%

今年は、読書指導をかねて、本校所定の「良書50選」の中から、年4回ほど(6月、9月、11月、2月)読書感想文を提出させることにしたが、それぞれの回でのベスト5をみると、生徒の興味関心がうきぼりにされているようである。(数字は148名中の実数)

第1回	① 友情	○	(32)
	② 狭き門	△	(16)

- ③ 阿Q正伝 △ (10)
- ④ 伊豆の踊子 ○ (9)
- ⑤ 風と共に去りぬ (8)
- 第2回 ① 友情 ○ (21)
- ② 阿Q正伝 △ (11)
- ③ 三四郎 (10)
- ④ 伊豆の踊子 ○ (8)
- ⑤ 桜の園 (7)
- 第3回 ① ソクラテスの弁明 (14)
- ② 友情 ○ (11)
- ③ 富嶽百景 (11)
- ④ 狭き門 ◁ (10)
- ⑤ 伊豆の踊子 ○ (9)

(○印の附してあるのは3回, △印は2回, ベスト5に入ったものである。)

Ⅲ 教科書の全体構造

そのような意識をもった生徒たちに対して, どのような教育内容が呈示されるか, ということは重要な問題である。前報告の最後のまとめで, その問題にはふれておいたが, 今年度から3ヶ年計画で, 教科書の構造配列と, その生徒への影響を比較研究をすすめることにした。

現行教科書の中から今までに検討ずみのものを除いて, 代表的なと思われるタイプの9種類をえらんで, その構造を分析してみた。

表1は, その教科書名と, 本文総頁中の各分野の割合を, 図1はその順序を示したものである。

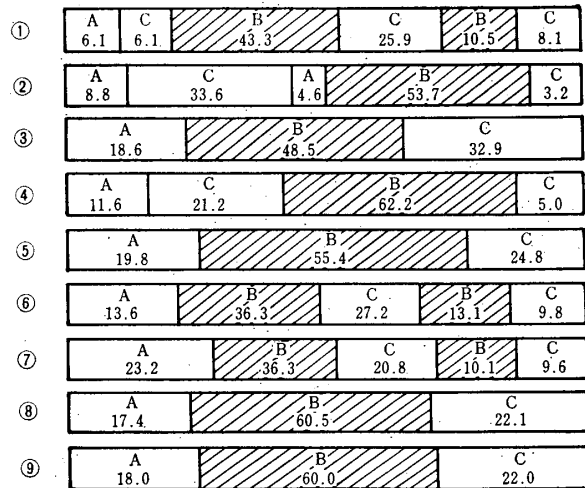
Ⅳ 配列構造

次にその配列の工夫され方を検討してみた。指導要領に示されたままの順序でなく, 独特の構造をもつもののみを示すと次の通りとなる。

表 1

教科書	割合			本文総頁
	A	B	C	
① 実教(旧)	6.1	53.8	40.1	162
② 三省堂(新)	13.1	53.7	35.8	178
③ ミネルバ	18.6	48.5	32.9	194
④ 実教(新)	11.6	62.2	26.2	164
⑤ 三省堂(旧)	19.8	55.4	24.8	202
⑥ 教出	13.6	49.4	38.0	198
⑦ 東書	13.2	46.4	30.4	168
⑧ 好学社	17.4	60.5	22.1	195
⑨ 清水	18.0	60.0	22.0	200

図 1



④ アイウの記号は「指導要領」そのまま。従ってAウは青年期の心理, Cアは現代社会の諸問題, Bアは西洋, Bイは東洋, Bウは日本, Bエは現代のそれぞれの思想を示す。①はテーマ別を示す。以下ずっと同じである。

- ① Aウ……BアBイBウ……C'ア…Bエ……
- ② ……………C'ア……B①……
- ③ ……………Bア1BイーBア②BエBウ……
- ④ Aウ……C'ア……B'ウーBア①Bイウ①B'アBウ②Bエ (Seiri)
- ⑤ ……………BアBイBウBエ
- ⑥ Aウ……①B(アイウ①)……C'ア…… (Bウ②Bエ) ……
- ⑦ ……………BアBイBウ……C'ア……Bエ
- ⑧ ……………BアBイBウBエ……
- ⑨ Aウ……BアBイBウ①Bエ①Bエ……

以上をまとめると次のようになる。

- 青年期Aウを前にもってきているもの 4/9
- 現代社会C'アを前にもってきているもの 5/9

④ 数字は%を示す。

④ 略記号
 A=心理学的分野
 B=倫理思想的分野
 C=社会学的分野
 以下同じ。

現代思想Bエを後にもってきているもの 3/9 } 6/9
 前にもってきているもの 3/9 }
 西洋をBアを分割しているもの 2/9
 日本をBウを分割しているもの 3/9

V 倫理思想分野の分析

倫社の中で最も重要な部分は倫理思想の分野であり、また生徒がもっとも困難を感じる所もそこである。(なお、この点については後出98-99P参照)

そこで、とくに倫理思想分野についてくわしい分析を加えた。

その1 系統思想的編集の教科書の場合

ア 思想分野の中での各思想の割合

図2は思想分野の中での西洋・東洋日本・現代の各思想の割合を示したものである。

図 2

	倫理思想内での各割合 %				Cアの頁数
	Bア	Bイ	Bウ	Bエ	
①	44.8%	5.8	29.9	19.5	15
②	50.0%	12.8	13.8	23.4	27
③	37.2%	21.3	23.4	18.1	16
④	44.3%	17.5 イウ ₂	6.3 ウ ₂	31.9	15
⑤	43.8%	15.2	24.1	16.9	17
⑥	47.1%	25.2	13.5	20.6	21
⑦	38.5%	12.8	28.2	20.5	21
⑧	52.8%	14.2	19.8	13.2	13
⑨	46.8%	11.6	26.7	15.0	16

(注 中でも重要と思われる西洋思想を斜線で示した。)

イ 古代・中世の西洋思想の比重と問題点一取扱いの違いの具体例一

次に西洋思想の中で重要と思われる項目をえらんで分析してみると表2のような結果である。なお、ヘレニズム期の取扱いの違いを示すため、次に教科書本文中のゴチック見出しをかかげておく。

- ① <ポリスの衰退とヘレニズム文化>
 <ヘレニズムの道徳 快楽と道徳>
- ⑤ <ヘレニズム・ローマ時代>、<ストア学派>
 <エピクロス学派>

表 2

	古代の頁数	古代のうちヘレニズム期 [㊤]	「エロス」	中世の頁数	中世のうちトマス・アクイナス	古代・中世の頁数
①	12	(3p)	(6行)	8	(2p)	20
③	10	なし	なし	8	原始キリスト教を除き何もなし	18
⑤	13	(3p)	なし	10	(2p)	23
⑦	14	(1p)	(4行)	7	㊤にあるのみ	21
⑧	13	(2p)	(5行)	12	㊤にあるのみ	25
⑨	12	(2p)	(7行)	7	(4行)	19

- ⑦ <世界市民の思想>
- ⑧ 理性と信仰<人間平等の思想>として『キリスト教』の中にくまれる。
- ⑨ <アリストテレス以後>

ウ 近代思想の占める比重と問題点

同じように、近代思想について分析を加えたものが表3である。

表 3

	<近代思想>		初め		終り		
	西洋思想の中での近代思想 頁数	%	ルネッサンス 宗教改革	モラリスト	ミル 進化論	コント	マルクス
①	19	48.7	×	×	○	×	×
③	15	45.5	○	×	×	×	×
⑤	24	51.0	○	×	○	×	×
⑦	17	44.8	○	○	○	○	×
⑧	29	53.7	○	×	○	×	○
⑨	37	66.0	○	○	○	○	○

	むすび 近代思想をどのように位置づけているか。
①	「近代的人間の誕生」
③	すぐ現代に続く
⑤	何も位置づけず
⑦	「ゆきづまり」として、
⑧	「ヘーゲル ← マルクス ミル」
⑨	「19cにおける市民倫理の展開」

エ 現代思想の取り扱い方

現代思想については三つの観点から分析を加えた。まず、(a)次の3の点について(表4)次いで、(b)その割合の比重について(図3)。(c)最後にその問題点について(表5)。

a 頁数と順序

- ① 「現代社会」の問題」を前にもってきているか………G

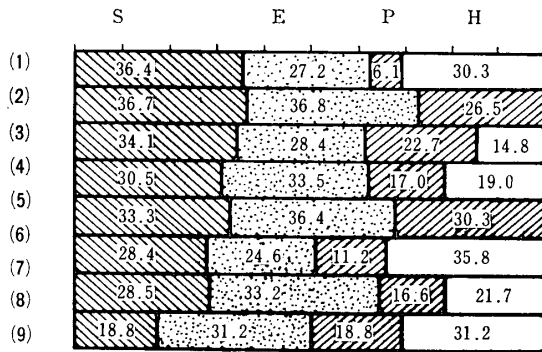
- ② 現代の思想の頁数
- ③ " の順序 S=社会主義
E=実存主義
P=プラグマチズム
H=ヒューマニズム

表 4

教科書	① G-	現代思想	
		② 頁数	③ 順序
(1)	○	17	S-E-P-H
(3)	×	15	S-P-E
(4)	○	20	E-S-P-H
(5)	×	19	S-P-E-H
(6)	○	18	P-E-S
(7)	○	16	S-E-P-H
(8)	×	22	S-P-E-H
(9)	×	18	E-S-P-H

b 現代思想のS, E, P, H の各比重

図 3



但し、(8)(9)は近代思想でマルクスについて3頁を費している。

c 問題点—各思想家のとりあげ方

現代の思想家のとりあげ方を分析したものが表5で

表 5

項目	教科書								
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
① マルクスの位置づけ									
㉞ ヘーゲルとの関連	○	×	○	○	×	○	○	○	○
㉟ 当時の思想の流れの中で	○	×	○	○	×	○	○	○	○
② フォイエルバッハを?	×	○	×	×	×	×	×	○	○
③ フロイドを?	×	×	○	×	×	○	○	×	×
④ ニーチェを?	○	○	○	×	○	○	×	○	○
⑤ パースを?	△	×	×	○	△	○	×	×	△
⑥ 実存の3段階を?	×	×	×	×	×	○	×	○	○
⑦ 実存思想内での最重要点	キ	×	キニ	サ	ヤ	キニ	キ	キ	ヤ
⑧ デューイ以外のプラグマチスト	○	×	×	○	×	○	○	○	×
⑨ ベルンシュタインを?	○	×	×	○	×	○	×	○	×

○ とりあげている
△ 名前だけはでてくる
× とりあげていない
キ|| キルケゴール
サ|| サルトル
ニ|| ニーチェ
ヤ|| ヤスパース

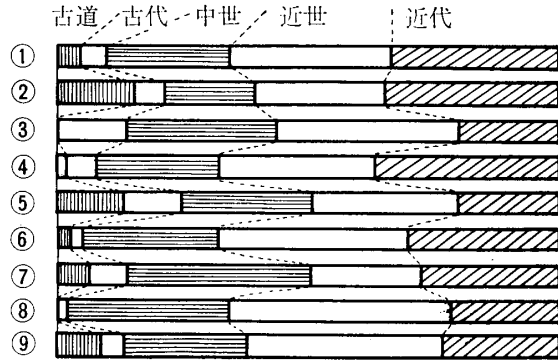
ある。限られた頁数で、ナイモノネダリに墮するきらいもないではないと思うが、最も重要な部分だけに考えさせられる。

オ 日本思想の取り扱い方

日本思想については、(a)各時代別思想の比重、(b)「古道」についての叙述、(c)近代思想家についての叙述と比重について分析した。

a 各時代別思想の比重

図 4



b 『古道』についての叙述

本文中のゴチック見出しをかかげた。()内は小見出し、

- ① 古代日本人の生活意識
- ② 固有の思想 (多くの神々、よがごととまがごと、もののあわれ)
- ⑤ 日本の古代の考え方 (古代人の神のみかた、古代人の罪の観念、愛の性格)
- ⑦ 神話
- ⑨ 神話にみられる考え方 (神々と天皇、清き明き心)

c 近代思想家についての叙述と比重

各教科書にみられる叙述を例によってゴチック見出しによってうかがうと、次の如くである。

- ① 近代社会の発足、啓蒙思想と国権思想、キリス

倫理社会の学習指導の実践的研究

- ト教とその影響, 自然主義文学と青踏社の運動,
西田哲学と理想主義, 民本主義と超国家主義
- ② 西洋思想の受容, 自由平等民権の思想, キリスト教思想, 自我の追求
- ③ 明治以前, 明治以後 (小見出し→西周, 福沢諭吉, 絶対主義, 中江兆民, 内村鑑三, 合理主義, ロマン主義, 超国家主義)
- ④ 天賦人權論, 信仰の自由と独立, 近代的自我の追求, 純粹経験と人間の学
- ⑤ 西洋精神との接触, 福沢諭吉, 夏目漱石
- ⑥ 文明開化と伝統保存, 近代的自我意識の成長,

- デモクラシー思想の成長
- ⑦ 西洋近代思想の受容, 独創的な思想, 日本的な思想
- ⑧ 天賦人權論, 日本的キリスト教, 独創的哲学の誕生
- ⑨ 西洋思想の移植, 西洋思想と日本人, 思想の芽生え
- 以上の内容のうち, 一定の思想家または思想についての叙述の頁数ないし行数を分析したものが表6である。

表 6

	福沢諭吉	国粋主義	中江兆民	内村鑑三	片山潜	幸徳秋水	河上肇	自然主義	白樺派	吉野作造	夏目漱石	西田幾多郎	和辻哲郎	昭ナリズム
①	1.0	0.3	㊦ 2行	1.1	写真説明	0.3	×	0.2	0.4	0.6	0.15	0.8	×	0.6
②	0.9	0.3	0.15	0.6	1行	1行	×	×	×	0.15	0.7	0.2	×	×
③	0.15	0.25	0.15	0.12	×	0.25	×	×	×	×	×	0.8	×	0.3
④	1.4	×	本文1行 ㊦ 4行	0.7	0.25	×	×	0.3	×	×	0.5	0.7	0.7	×
⑤	1.8	×	×	×	×	×	×	×	×	×	2.2	×	×	×
⑥	0.8	0.25	0.4	0.75	×	㊦ 2行	0.3	×	×	0.6	×	0.3	0.3	0.3
⑦	0.6	0.15	1行	0.7	2行	×	0.12	×	×	1行	×	0.8	0.8	1.0
⑧	1.5	0.15	×	1.0	×	×	×	×	×	×	×	2.0	×	×
⑨	0.6	0.4	0.25	0.3	×	0.20	×	0.25	0.25	0.15	0.6	0.7	0.9	×
計	8.75	1.8	1.25	5.27	0.33	0.58	0.42	0.75	0.65	0.9	4.15	5.3	2.7	2.2
					1.33				1.55					
順位	①			③							④	②	⑤	

その2 テーマ別編集教科書の分析

ア 「テーマ別」部分の位置づけ—その構造

テーマ別教科書はテーマ別内容だけ, という例は無く, むしろ新しいものほど, 一般的ないし歴史的叙述をつけ加え, というより, 一般的歴史的叙述の後でテーマ別の整理をつけ加えるというタイプが出てきているのが目につく。表7に, その頁数を示した。

表 7

	一般的(歴史的)叙述	テーマ別内容
②	4 2 P (○)	5 2 P
④	6 6 P (○)	1 7 P
⑥	1 0 P (×)	6 1 P
⑩	1 0 P (○)	5 8 P

イ とりあげたテーマ

テーマ別教科書の場合, とりあげるテーマはその効

果の大半を決定するといつてよい。その点から見出し項目のみでも挙げておこう。

- ② I 幸福 ①幸福を善とする考え方
②幸福を善と区別する考え方
③現代社会と幸福
- II 自由と平等 ①自由のいろんな考え方
②平等のいろいろな考え方
③現代社会と自由・平等
- III 愛 ①愛の特徴的な性質
②愛のいろいろな姿
③現代社会と愛
- IV ヒューマニズム ①その歴史的展開
②現代のヒューマニズム
③現代社会とヒューマニズム
- ④ I 幸福のとらえ方

II 価値のあり方

III 現代における幸福と価値の問題

㊦ ④は、歴史的部分で<人間の自覚のありみ><自由>の項を扱い、テーマ別の部で、1.外に向かう自由の発展、2.自由の内面化と人格の確立、3.近代日本における自由、4.自由をめぐる問題(自律、社会的自由、実存的自由 etc)をとりあげている。

- ⑥ I 宗教の発生と世界宗教
- II 自我の自覚と近代的自我
- III 社会の発展と社会思想の展開
- IV 自然の思想とその展開
- ⑩ I 人生の幸福
- II 人格の完成
- III 自我の自覚
- IV 人間の自由

ウ テーマ別教科書と系統史教科書の問題点

—カント・ヘーゲルを例として—

カント・ヘーゲルの扱いを例として、それぞれの問題点をみておきたい。

<系統史の場合>

ア 位置づけ—

- ① (合—経)—(啓—㊦)—(功—進)—KH/
- ③ (合—経)—K—(感・快・利己・権力)—(功)—(ロマン)—(伝統・全体H)/
- ⑤ (経・合)—(啓—㊦)—KH—(功・進)/
- ⑦ (経・合・㊦・経)—(啓・㊦)—KH—(功・実・進)—ヘーゲル批判/
- ⑧ (経・合)—(啓・㊦)—KH—(マルクス・エンゲルス)—(功・進)/
- ⑨ ㊦—(経・合)—(㊦・啓)—KH—(マルクス)—(コント・功・進)/

合=合理論 経=経験論 啓=啓蒙思想
 功=功利主義 進=進化論 実=実証主義
 感=感覚論 快=快樂主義 ㊦=モラリスト
 ㊦=カント ㊦=ルソー ㊦=ヘーゲル

イ さかれた頁数

	カント	ヘーゲル
①	2.9	2.6
③	2.0	2.0
⑤	2.0	1.4
⑦	1.3	0.9+批判(5行)
⑧	4.5	3.5
⑨	5.0	3.0

ウ どのように扱われているか。

—ゴチック見出し— (<< >>は大見出し)

「カント」の見出し

- ① <カントの道德説><カントの人格主義><永久平和論>
- ③ <理性道德論>
- ⑤ <<ドイツ観念論>><カント>
- ⑦ <<人格の尊厳>><カント>
- ⑧ <<道德の世界>><批判主義の考え方><人格の自由><目的の王国>
- ⑨ <<カントの人格主義>><カントの出発点><善とは><道德法則><自律性><人格の尊重>

「ヘーゲル」の見出し

- ① <ヘーゲルと市民社会の道德>
- ③ <<ロマン主義>><ヘーゲル>
- ⑤ <<ドイツ観念論>><ヘーゲル>
- ⑦ <<人格の尊厳>><ヘーゲル>
- ⑧ <<平等への課題>><個と全体><歴史のなかの自由><人倫的自由の展開>
- ⑨ <<19世紀における市民倫理の展開・1>>ヘーゲル<><市民から民族へ><弁証法とは><精神の倫理>

<テーマ別教科書の場合>

カント、ヘーゲルをどのようなテーマで、何回とりあげているか。次に表にしてまとめておく。

	とりあげた回数	主要叙述部分のゴチック見出し	総頁数
カ ン ト	②	「幸福の原理の否定」 「自己自身の完成と他人の幸福」 「内面的自由」	3.6
	④	「自律としての自由」 「定言命令の意味」 「自らの王国」 「心情の倫理と責任の倫理」	5.0 (3行)
	⑥	「カント哲学の根本問題」 「道德律」「人間の尊厳」 「人間の有限性」	2.5
	⑩	「近代の人格論」 「自由論」	2.6
ヘ ー ゲ ル	②	「弁証法」	(7行)
	④	「精神と歴史」「人倫の段階」 「自律・自由・社会的自由」	5.2
	⑥	「近代的自我の崩壊」	0.5
	⑩	「自由論—人倫」	1.7

テーマ別教科書の中で気がついたことは、カントはおおむねふれられているが、ヘーゲルについてふれたものが非常に少ないということである。例えば、教科

書②の場合

ヘーゲルは最初の短い歴史的叙述の

1. 西洋の考え方	PP.
① 理性の自律	79
② 神への愛	92
③ 経験の尊重	

の中の①のギリシャ思想を中心とした終りの部分に
 “デカルト、カント、ヘーゲルなどの思想は基本的にはこのような考え方の上に立っているが、とくにヘーゲルは……”

として、以下6行で「弁証法」の説明が出ているだけである。

(巻末資料に15行ほど略伝と原典引用があるが。)

従って、この教科書ではヘーゲルはほとんどとりあげることができない。

なお、前出系統思想史の場合でも、教科書③は特殊な編集の系統史で、《西洋近世の倫理想》という形で、近代から現代までのすべてを包括している。その項目をあげると次のようである。(一部分にカントは出てくる)

I 近世倫理の諸理論

＜概観＞＜自由主義の政治論＝ロック＞＜理性
道徳論＞＜道徳感覚論＞＜快樂論・利己主義・
 権力主義＞＜功利主義＞

II ロマン主義

＜ロマン主義＞＜伝統主義・全体主義＞＜ヘーゲル＞
 ＜ロマン主義の意義＞

III 現代社会の倫理的課題

＜自由主義と社会主義＞＜戦争と平和＞

IV 現代の社会観

＜進化論と倫理＞＜プラグマチズム＞＜生命哲学＞
 ＜実存主義＞＜科学と倫理＞

従って、＜カント、ヘーゲル＞といった、ひとまとまりの単元での扱いは出来ない。ヨーロッパ近代という、ひとまとまりのものとしての中で、位置づけることしか出来ない。

VI 倫社学習への反応とその変化

以上のような分析に立って、実験的に今年度は、高2の3クラスにそれぞれ、A組①の教科書、B組②、C組③を使用し、比較研究をすすめた。教科書の内容構造にできるだけ忠実にすすめ、それぞれの内容の差異が、生徒の反応にどのように現われるかをみようと考えた。

その反応結果は次の通りである。

(数字は%を示す)

1 有益度の自己評価

表 8

組	反 応	I (4月)	II (7月)	III (10月)
A	+	62	40	44
	○	24	32	41
	-	14	28	15
B	+	78	64	77
	○	16	28	22
	-	6	8	6
C	+	76	58	76
	○	18	32	18
	-	6	10	6

2 興味関心度

表 9

組	反 応	II (7月)	III (10月)
A	+	40	46
	○	32	32
	-	28	22
B	+	64	70
	○	28	18
	-	8	12
C	+	58	68
	○	32	20
	-	10	12

3 領域別関心度

1. 心理学的分野
2. 倫理想史的な分野
3. 社会学的分野

表 10

組	領 域	II	III	おおよその割合
A	1	56	60	6
	2	23	20	2
	3	21	20	2
B	1	69	70	7
	2	6	13	1
	3	25	17	2
C	1	52	46	5
	2	25	34	3
	3	23	20	2

表 11

(自分たちの欠陥)	全体の中で%	男	女
感覚的感情的にものごとをうけとりやすい	59(27)	57(26)	62(28)
自分自身を客観的にみようとしない	46(9)	49(10)	40(8)
断片的知識にすぎない	52(12)	56(17)	44(8)
知識内容が不完全である	31(10)	32(9)	30(12)
自分から積極的に考えようとしない	37(13)	41(13)	30(16)
別に考えなくても今の社会でうまく生きていけばよい	26(9)	30(15)	26(9)
「思想」とはアタリマエのことをむつかしくしたものだ	7(1)	7(1)	6(0)
「思想」なんて役に立たないし、かえって厄介なものだ	4(0)	6(0)	0(0)

4 自分たちの欠陥の自覚度とその領域

生徒たちが倫社学習をすすめていく中で、自分たちの欠陥としてどのようなことを自覚するかを、選択肢式で調査したのが表11である。

5 <思考の契機>の自己評価

最後に、彼らがどのような時に<思考>しようとするかを同じく選択肢で調査した結果が表12である。

VII 残された問題点

1. 「思想無用論」について

倫社学習を指導する際問題として考えたいのは

思想(1)＝アタリマエの考えをわざわざむつかしくしたもの、

思想(2)＝現実には役立つもの、

という等式から、思想無用感をもっているものの存在である。

そこには、**思想(3)……思想(n)**という新しい、役に立つ新しい思想を形成していこうとする自分の問題意識も、どこまでも追求していくネバリ強さも、ない。

それは何故なのか。

どのようにしたら、即自的(an sich)な考え方から、対自的(für sich)な考えに転換させ、それを

媒介とすることによって統一的全人格的(an und für sich)な思想にまで形成していくことが、できるのだろうか。

実感(an sich)を基盤とし、出発点としながら、その固定的自閉的な思考の殻を破り(概念くだき)、客観的・多面的・分節的な論理的思考操作を経て、自己の視野構造を自覚し、論理構造(シエマ)を形成し、統一核を中心とした理論的思想にまで高めていくために、どのような教育内容が提示されればよいのか?

それは、内容の素材のもっている素朴な感動性(1)だけでなく、文脈のもつ論理・事実をつらぬくものを感じ理解する時の高次の感動性(2)をふくむものでなければならないだろう。また既成の思考の枠がくずされ、未知の世界に眼が開かれる時の感動性(3)もあるだろう。その感動が自己の意欲・感情などを含む人格的かかわりの中にくいこむとき、**思想(3—n)**追求のエネルギーとなりうるのだ、と思う。

しかし、そのようなパトスの基盤の上に、**思想(3—n)**形成の操作をなすべきロゴスの形成は、どのような教育内容の構造によってなしうるのだろうか。「倫理」にまでつながりうる「論理」とはどのようなものであるのか。

表 12

(どういふときに考えようとするか)	全体の中で%	男	女
困って何とかしようとする時	60	58	62
今まで思ったこととちがうものに直面した時	43	42	44
不安で淋しい時	31	32	30
未知のものへの興味から	23	30	10
自分の感じ心の底の動きにピッタリしたものにふれた時	19	19	18
すばらしい内容の本やテレビにふれた時	10	8	12
反撥し、反抗したくなる時	9	9	8

2. 教育内容の構造化

広岡亮蔵（名大教授）の分析に従えば、学習のつまづきは次のような弱点から生まれるという。すなわち

- | | | |
|-----------|---|-----------------------------|
| A, 発端の段階 | } | 1. 意欲が消極的である。（距離、挫折、逃避などから） |
| | | 2. 経験の貧しさ。殻の固さ。 |
| B, 展開の段階 | } | 3. 分析する力が弱い。 |
| | | 4. 結合する力が緩い。 |
| | | 5. 積み上げていく力がもろい。 |
| C, 現実化の段階 | } | 6. 抽象する力が低い。 |
| | | 7. 練習の頻度が乏しい |
| | | 8. 適用が不十分 |

（本校紀要第6集参照）

その分析に従えば、1の考察は、その発端の段階には到達しているようであるが、その展開の段階のところでとまっている感じである。

それとも、教育内容とはまず、＜いかに生徒とのかかわりをもつか＞の部分をもっとも大事で、展開はもっぱら教育方法に委ねられるものなのであろうか？そうではなく、とくに、教育内容の構造化—という場合、その分析・結合・積み上げ・抽象・現実化—の各段階をふまえ、その授業での具体化まで考慮に入れながら、系統化・構造化されてゆくべきものとする。

1の考察に加えて、以上の考察を満足させるような教育内容の構造化を追究していきたい。

3. 来年度への課題

来年は本年に引きつづき、内容の比較分析を主とし

て実践と研究をすすめていく予定であるが、とくに課題としてとりあげたいことは、前述の1と2の問題をどう解決していったらいいか、ということである。

更に、それとからみあうわけであるが、

①思考・認識の過程をどのようにおさえるか

②現代の思想にどうとりくむか

③東洋・日本の思想を現代にどうつなげるか

の問題に焦点をしばりながら、進めていきたいと考えている。

とくに②と③は「明治百年」祭の1968年度において種々の問題を提起してくることと思われる。

①の問題については、「思考の科学」科の実験的ところみ（本紀要P. P11—12参照）とも関連させて追究したいと考えている。

4 むすび

これで第7回の報告を書き終えたわけであるが、今日の新聞（43年1月7日附）は文部省の、「高等学校教育課程改革」についての発表をのせている。「十年一昔」という言葉があるが、1970年度に第10報告を書くことになるなと思って、歴史と教育という問題をしみじみと感じさせられる。

今回の第7報告は、紙数の制約もあって、主としてデータを中心にして解釈はあまり加えなかった。読まれる方が適宜解釈を加えていただきたい。

最後に、全国の志を同じくする諸師の御批判と経験の交流を希望してむすびとしたい。